



袖珍仙方

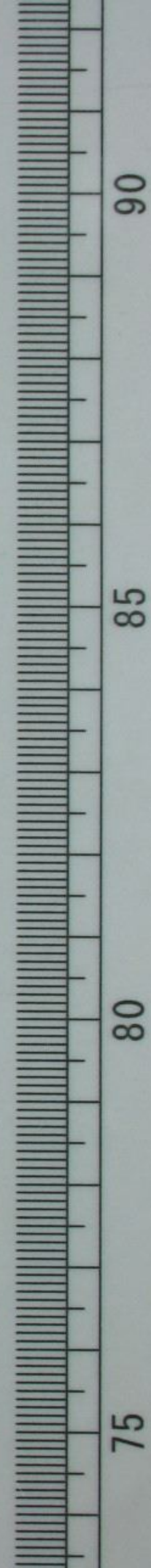
六卷圖

卷一

卷二

十武

298



武中
號 298

六書函之內
本也

袖珍仙方序

古今著方之書志在濟世

仁人之心亦天地好生之心

也諸病之救急經驗之單方

散而有諸方書今錄之名袖



岸友勝之品

岸友勝之品



珍仙方。窮鄉下邑。於藥物鮮
有之所者。未必無小補云。

正德甲午十二月

法橋 奈良宗哲

袖珍仙方叙

天生地成人。長養其間。元氣充榮。衛
則藥餌無所用也。一遇有瘵。醫療所須。
其急如饑渴之於飲食。欲須更懈而不
可得。經方之有關於性命亦大也。奈良
宗哲氏業醫名時。以聘請餘暇。披尋不
倦。嘗擬人家日用得之易。有足以治疾。

者隨類纂入彙而成編蓋欲詔之窮鄉
遐陬請醫致藥難于卒辨席門茅屋之
下抱疾無告者其為惠不少也雖所具
未若他書多率皆方之已驗者可濟實
用也夫藥貴於愈疾若能奏効何更求
難得者貴遠賤近哉行之通都大邑
人所檢閱不廢也宋張相公進藥
丸有言誰知至賤之中有殊常之効此
紳為或近也余嘉著述意為之叙

正德癸巳九月一日

稻若水書

加賀國金澤
鳳岳宮庄氏
之塾鶴林堂
岸友勝之印



凡例

古^コ來^{ライ}ノ明^{メイ}醫^イ方^{ホウ}書^{シヨ}ヲ撰^{セン}述^{ショク}スルニ多^タクハ易^イ方^{ホウ}方^{ホウ}ヲ載^{サイ}ス是^{コト}救^{キウ}急^{キウ}ノ意^イナリ此^{コト}書^{シヨ}專^{セン}千^{セン}金^{キン}方^{ホウ}ヲ基^キニテ歷^{レキ}代^{ダイ}明^{メイ}醫^イノ述^{ショク}ル所^{トコロ}ノ易^イ簡^{カン}方^{ホウ}ヲ集^{シユ}メ記^キス遠^{エン}國^{コク}離^リ島^{シマ}醫^イ藥^{ヤク}十^{ジュウ}キノ地^チ病^{ヤム}テ死^シニ至^イル雖^イ凡^{ソドモ}治^チ術^{ジュツ}十^{ジュウ}ク唯^タ天^{テン}然^{ゼン}ニ任^ニス洛^{ラク}陽^{ヤウ}ハ富^フ饒^{ニウ}ノ地^チ醫^イ藥^{ヤク}乏^{トモシ}カラズト雖^イ凡^{ソドモ}一^{イツ}切^{セツ}人^{ニン}急^{キウ}又^{マタ}ハ深^シ更^{カウ}十^{ジュウ}ト二^ニハ醫^イヲムカヘガ

五洲... 辭... 醫... 凡例... 此書... 專... 千... 金... 方... 易... 簡... 方... 撰... 述... 撰... 述... 撰... 述... 撰... 述...

夕^ト其^レ上^ニ至^リ貧^ノ人^ハ醫^ラムカ^ヘカタク
重病^ヲ反^ト雖^レ凡^ニ徒^ニ月^日ヲ過^シテ終^ニ
死^ニ至^ル者^多シ予^深ク歎^之故^ニ此^編ヲ
ナ^ス惣^シテ此^書ニ記^スル所^ノ藥^方ハ古^コ
來^ノ明^醫經^驗ノ藥^方ニシ^テ少^王驗^十キ
藥^方ニ非^ハ人^覽人^深ク尊^信シテ用^ヘキ者^モ
十^リ故^ニ藥^方ノ後^ニ各^出書^ノ題^号ヲ加^ス
ス猶^不審^ノ人^ハ本^書ニテ考^ヘシ

此^書諸^病悉^ク易^簡方^ヲ記^ト雖^レ凡^ニ病^ニ緩^ク
急^{アリ}人^ニ虛^實アリ醫^ラムカ^ヘテ脈^之
ヲ祥^ニシテ治^ルニハシカズ此^書ニ耽^リ
テ醫^ヲカ^口シメ思^フベカラズ此^書ハ唯^ニ
偏^國或^急症^又ハ旅^人若^ハ至^貧ノ人^ナド
ノ為^ニルノミ
一
病^門ノ次第^ハ萬^病回^春ニ隨^フ然^レ凡^ニ古^コ
古^書ニ易^簡方^十キ病^門ハ闕^之卷^末ニ雜^シ

病門三附ス是回春ニ載ガル病ヲ集記ス
諸方書ニ記ル處ノ藥方繁多ナリ然レ氏
今此書一載ル處ノ藥方ハ民家戸ニ有ル
所ノ品ノ之ヲ載ス故ニ藥方多カラズ
此書ニ載ル藥種四季戸ニ有ル品ヲ以ス
春有テ夏無ク秋有テ冬無ノ類タトハバ
甜瓜刺ヲ治シ李果咳ヲ治ル類ハセズ
兼テ修蓄ノ類タトヘバ隔羊膺瘡ヲ治ル

ノ類ハノセズ唯急ニ調フル藥品ノ之ヲ
記ス
生類ヲ殺シテ藥トスル類ハノセズ孫眞
人ノ生ヲ去ルヲ遠シト云テ思フ故ナリ
墮胎ノ藥ヲ載セズ夷堅志ニ白牡丹女墮
胎ノ藥ヲ賣テ現ニ惡報ヲ受ト云ヘリ我
儒モ亦不仁ノ事トス故ニノセズ
古方或一竹二竹二外三外ト量目ス今一

二錢或一二蓋トス是專醫學正傳ノ例ニ

故フ

此書童蒙家兒女見安カラシメント思フ故

二國字俗言ヲ以テ記予不学庶忽ナリ過

ル下多カルベシ後君子正之幸甚

袖珍仙方引用書目

外臺秘要

方勺泊宅編

摘要方

初虞世必効方

癸辛雜志

雲林神效

醫宗必讀

明醫雜著

衛生易簡方

醫方大成

救急方

集靈方

食醫心鑑

魯府禁方

孟詵本草

種杏仙方

藏器本草

續十全方

余居士選奇方

事海文山

法生堂經驗方

迥効方

仲景傷寒論

百一選方

李絳兵部手集

靈樞經

瀕湖集簡方

病源候論	唐韋迪獨行方	梅師集驗方
千金方	陸氏積德堂方	葛洪肘後方
冠氏衍義	古今醫統	南陽活人書
濟世秘覽	傷寒類要	婦人良方
本事方	本草綱目	楊起簡便方
生生編	陳氏經驗後方	醫書大全
奇効醫述	保嬰撮要	壽世保元
廣五行記	食鑑本草	九齋衛生方
蕪恭本草	已志	溫隱居海上方
名醫類按	道藏經註	物類相感志

范汪東陽方	大平聖惠方	傷寒雜法
食療本草	赤水玄珠	貞元廣利方
趙宜真濟急方	劉長春經驗方	證治準繩
邵真人經驗方	全幼心鑑	活人心統
夏氏益奇疾方	證治要決	道藏經
危氏得効方	儒門事親	修真秘旨
傳心適用方	陳直奉親書	孫氏集驗方
嬰童百問	周憲王普濟方	楊氏家藏方
仁齋直指方	內經素問	加宣方
遜齋問覽	蕪頌圖經本草	蕭顯明梁史

御藥院方

醫學六要

繼洪澹寮方

延年方

周密澹然齋抄

朱端章家寶方

活幼口議

陳言三因方

類經

萬病回春

集玄方

醫林集要

子母秘錄

南史

延年秘錄

醫學入門

玉機微義

孫氏仁存方

普殿產寶

丹臺玉案

楊氏產乳

朱氏集驗方

十全博効方

產書方

唐璠經驗方

瞿仙壽域方

熊太古冀越集

心傳方

甄權藥性論

譚氏小兒方

陳延之小品方

唐仲舉方

嬰孩寶鑑

小兒秘訣

幼幼新書

隨身備急方

外科精義

柰仲南永類方

醫學正傳

癘瘍機要

簡要濟衆

李樞奇方

傅氏活嬰方

外科正宗

吹劍續錄

正體類要

開寶本草

談楚翁方

吳曼扶壽精方

證類本草

北夢鎖言

資生經

聖濟總錄

徐伯玉方

太平御覽

鐵圍山叢談

口齒類要

陳日華經驗方

程克丹溪心法

古今秘驗方

斗門方
 延齡至寶方
 孫用和秘寶方
 錢相公篋中方
 濟世全書
 金匱要畧
 瓊碎錄
 崔氏纂要
 庚堅志
 劉鼓假日記
 群談採餘
 領要方
 五行書
 通變要法
 丹溪怪病單
 鍼灸聚英
 甲乙經
 博物志
 王氏農書

書目終

袖珍仙方目錄

岸友勝之品

- 一 中風 風臟をばいよりをなりなり
- 二 傷寒 寒氣ひやうき表ひたよりなり
- 三 中寒 寒氣ひやうき表ひたよりなり
- 四 感冒 がいごうのりなりなり
- 五 中暑 暑あつのりなりなり
- 六 中毒 何なにと食たてたりなりなりなり
- 七 食傷 食たりなりなりなり
- 八 痰 どのり痰たんなりなり
- 九 瘡 どのり瘡そうなりなり
- 十 痢病 大用血たいようけつなりなり

七十 泄瀉 しやくわく 大便のゆるゆるなる病なり

八十 霍亂 くわくらん 吐瀉を伴ふ急病なり

廿 膈 かく 食の通らざる病なり

廿 嘔吐 おうと 吐瀉を伴ふ急病なり

一廿 呃逆 おつぎやく 食の通らざる病なり

二廿 吞酸 どんさん 食の通らざる病なり

二廿 饋糲 きうじやく 食の通らざる病なり

三廿 氣鬱 きよく 氣のつまる病なり

三廿 痞 ひ 腹の膨らむ病なり

四廿 鼓脹 こちやう 腹の膨らむ病なり

四廿 水腫 すいしゆ 一服してくらくとせしむる病なり

五廿 積 せき 腹の膨らむ病なり

六廿 黃疸 わうたん 愁身黄なる病なり

七廿 吐血 とけつ 血を吐く病なり

七廿 衄血 けつ 鼻血のあがる病なり

九廿 下血 げけつ 大便のあてに血が出る病なり

廿 諸血 しよけつ 一身に中がごとく血が流れる病なり

一廿 小便血 せうべんけつ 痛む小便に血が出る病なり

一廿 汗 あせ 春秋冬のあつたつた汗が流れる病なり

二廿 眩暈 けんえん めまいする病なり

二廿 麻木 まふ 身のこむもろくなる病なり

三廿 狂 きやう ことごとく狂ふ病なり

四廿 癩 らい 俗にさかすまひの病なり

四廿 健忘 けんわう 物事を忘れやすくなる病なり

五廿 驚悸 きやうき 心がたふやまふ病なり

五廿 不寐 ふまい 寝られぬ病なり

六廿 邪祟 じやくずい つまらぬ病なり

六廿 小便濁 せうべんじやく 小便に濁りが出る病なり

七世 遺精 俗云、秘してのち内は精のこもる 七世 淋病 小便通じざることなり

八世 遺尿 小便 こぼるなり 九世 小便不通 小便通じざることなり

九世 大便不通 大便通じざることなり 十世 大小便不通 大便小便通じざることなり

十世 痔 尻の穴 こむなり 一四 脱肛 尻の穴 はれ出しむなり

二四 虫疰 ゆいしむなり 三四 頭痛 ぶづのいしむなり

三四 鬚髮 こむいしむなり 四四 面 くのいしむなり

五四 耳 身のいしむなり 六四 鼻 鼻のいしむなり

七四 口舌 口舌のいしむなり 八四 牙齒 齒のいしむなり

十五 眼目 目のいしむなり 二五 咽喉 かのいしむなり

二五 癭瘤 ぶれのいしむなり 三五 腹痛 くのいしむなり

四五 脇痛 くのいしむなり 四五 腰痛 くのいしむなり

五五 疝氣 腹のいしむなり 六五 婦人經閉 月水の通じざることなり

六五 血崩 月水 ふりにおびとしく通じて止むなり 七五 帶下 きのいしむなり

七五 産前 子のいしむなり 一六 産後 子のいしむなり

六 乳病 ちのちまひ りのちまひなり

五 小兒初生 せうにちまひ せいのちまひなり

五 不尿 ふせう せいのちまひなり

六 撮口 さつこう 口と同時聲なり

六 臍瘡 さいそう へそよりちまひなり

七 軟疔 なんぢう ちまひなり

八 夜啼 やてい よそよそなり

四 前陰 ぜんいん 小便道の痛なり

五 不乳 ふにゅう せいのちまひなり

五 大小便不通 たいせうべんつうたう 大便小便通

六 臍風 さいふう 臍より風引なり

六 口瘡 こうそう 口中れなり

七 丹毒 たんどく ちまひなり

八 盤腸 ばんじやう ちまひなり

九 語遲 ごち のちまひなり

九 疳 かん ちまひなり

十 外科癰 りくふくよう せいのちまひなり

二 便毒 べんどく よそよそなり

二 腫瘡 しゅそう ちまひなり

三 癩風 れいふう ちまひなり

四 諸瘡 しよそう ちまひなり

九 驚 おどろ ちまひなり

九 痘 たう ちまひなり

一 疔 ぢう ちまひなり

二 下疳 げかん 陰莖のちまひなり

三 疥瘡 せいそう ひびきなり

四 厲風 れいふう ちまひなり

八 杖瘡 じやうそう 打撲なり

九七 金瘡

切らざれば血とあま

八 湯火傷

やけどとあり

一八 虫獸傷

虫のじらりと獸の

五 骨體

のこにやみあまら

七八 五絶

益て死らうと覺て死らうと

凍死の業なり

十九 中惡

死人の毒氣と云

一 雜病

ありありのり

目錄終

袖珍仙方

法橋

奈良宗哲

撰

● 中風

○ 中風 口噤恍惚

とて手足とびれ

或ハ腹中痛

或ハ息絶又息出ら

伏龍肝

かまとの利此

をを粉にして水茶碗

よ一をの半入一をの煎用て

千金方

○ 又方

艾を水茶碗よ二をの入一をのよせんと布



岸友勝之品

切と浸て布切とわくもろもろ胸とわくもろ
てようし冷もバななくか用ゆ
陸氏積徳堂方

○中風腹痛よハ

素湯よ塩とよく用ゆ一痰を吐て早速
よいつまやびわろり
肘後方

○中風口噤らるにハ

芥子 きる 醋茶碗よ二ふ入一ふのせ入
頷頰の下につけてよ
冠氏衍義

○中風口噤らるよハ

石灰醋よそ炒てらぬて泥のこくく一頰よ
塗花へゆをこくくよハ右よぬを右へゆがぬる
冠氏衍義

○中風口噤斜て二年も三年も愈さるよハ

青松葉五々細剉縮の袋よ入酒五合入煎て
二合半よちりる時松葉を取出してとて酒
をりがりづのびべー
古今医統

○中風眩よハ

蟬退 一しとわをそそり 武々少一炒て粉けて

酒よくのひべー

古今医統

○中風夢中の擲よひなりりるよハ

香油香油生姜汁生姜汁等分等分合合

て少く用てて少く用てよよ千金方

●傷寒

○熱熱つつくくささくく頭痛頭痛よりよりよよハ

艾艾三三々々水水茶茶碗碗よよ三三々々ハハ一一々々ののよよせんせんト

りりららひひててよよハハ肘後方

○又方

葱葱白白髪髪漬漬ととももよよきき々々生生姜姜三三分分水水茶茶碗碗

よよ三三々々ハハ一一々々ののよよハハ煎用煎用ててよよハハ南陽活人書

○傷寒傷寒病付病付てて二二日日三三日日内内よよハハ

葱葱白白本本細細判判白白粥粥の中の中ハハ入入よよハハ煮煮てて醋醋

少少入入てて食食べべハハ汗汗出出ててよよハハ濟生秘覽

○癰癰疔疔のの傷寒傷寒熱熱つつくく發發斑斑出出るるよよハハ

艾艾五五々々酒酒茶茶碗碗よよ三三々々ののよよハハ一一々々ののよよハハ

りりららひひててよよハハ傷寒類要

○又方

葱白（白）と本水（水）とせんと用てより
葱（葱）と食べり
傷寒類要

○懷妊（妊）の傷寒（寒）人をも見らるる夢中（夢）より
とらよハ

艾（艾）すゝ酢（酢）を至極（至）焚（焚）く炒（炒）ついで縮（縮）ま
包脐（脐）の下（下）を熨（熨）暖（暖）てより
婦人良方

○陰證（陰）の傷寒（寒）手足冷（冷）て腹痛（痛）よハ

硫黄（硫）を三分（分）子（子）を
せんト用てより
本事方

○傷寒（寒）と病（病）て向（向）のち（ち）と嫁（嫁）して傷寒（寒）の毒（毒）

氣（氣）と傳染（傳）熱（熱）つよよハ
兩方（兩）ととよ尖（尖）と（と）鼠（鼠）屎（屎）韭（韭）の根（根）煎（煎）

トのみそより
活人書

●感冒（感） ぐい（ぐ）とらるるあり

○風引（風）

胡麻（胡） 黒胡麻（黒） 白胡麻（白） 式（式）成（成）程（程）
う（う）炒（炒）あつ（あ）と内（内）酒（酒）と物（物）と暑（暑）て寐（寐）て
汗（汗）をか（か）くべり
本草

●中寒

寒氣よわたりるなり

○卒に寒氣よわたり唇青く卵縮六脈なきが

ぎんぎん

葱一把根と青之所を切り捨白をわす

わづり臍の上よを灸して幾度も灸

すべし葱焼きバ度く入て手足わす

まるまで灸してより

南陽活書

○又方

湯よて芥子を臍の中よ一ふのよつめ

るる物の外より手拭と湯よつけたりてわす

びべし冷せとびく手拭と湯よつけ

わすびべし

楊起簡便方

○

寒氣よわたり手足冷て腹痛よハ

艾五分わつり湯よひく臍の中に入れて

生生編

○又方

黒大豆五合炒て皮と捨酒茶碗よ三盃入

一盃よせん酒とのびべし

古今医統

○又方

胡椒五分酒さけすて是このせとてより

古今医統

○又方

塩しおとまれんに一ふいあつくいり布切ぬみつみ
臍へその上うへとわくくびべーー塩しお冷ひやバいくくびも敷く

古今医統

●中暑ちゆうしよ復たがあつのいよわらりらる病やまあり

○暑氣あつよわらり既も死しとすりみハハ

胡麻こまをよらわつく炒あ新あたら汲ひ水みづをまてのとて

經驗後方

○暑氣あつよわらり頭づ痛うすりみハ

砂糖さとうと水をまてのとてより

古今医統

○暑氣あつよわらり既も死しとすりみハハ

新あたら汲ひ水みづ少すこし鼻のあなへいて扇をまてあそく

るいり至極ごく重おもさ病人びやうじんのあなへいて扇をまてあそく

ざり地ちを一尺せきあまりわりて其その中ちゆうへ水をいてくこ

ふつのあな其その水みづと鼻のあなへいて扇をまてあそく

とらるいちちりり水みづを飲バ死と

古今医統

○暑氣あつさきはわづり咽渴のどがかわ死にととらふ

路上みちのうへ煖土あたたかい 蒜にんにく等ら分をとりたぐらう水みづは

くさくさくうのくさくさ水みづを用もちて

古今医統

○旅人たびびと又ハ農夫のうたふ目めよてつされて暑氣あつさきにわづりす

み死にととらふハまづ其病人そのびやうじんと日陰ひかげよつ

まゆさあとのけはまゆ糸いとを並なら目め向むかう土つちを

瞬はなはのららりは堤つとのごとくにとと外あれ人ひとは病びやう

人の脬せう乃中なかへ小便せうべんをさとべーとらまら

より

医書大全

○又方

生姜しょうがと蒜にんにくととあつ火あさ湯ゆ一いっ入いれくみくと

湯ゆととに飲のみせ

古今医統

●食傷

○一切いっけつの食傷しょくじやうは

地漿水ぢじやうすい 取とれあつさらら地ぢと二尺にじふあまり堀ほてられ

中なかへ水みづととあつさららりりとらり

本草

○一切いっけつ乃食傷腹痛しょくじやうふりゆうはハ

塩湯しんゆ多おほくのとてらり

奇効医述

○小兒食傷（小兒食傷）よハ 鳥の羽根咽（鳥の羽根咽）入（入）て探（探）し食物（食物）をとことと
てよう

保嬰撮要

●中毒（中毒）

何（何）と食（食）てわ（わ）りい（い）ろ（ろ）く（く）い（い）ん（ん）覺（覺）わ（わ）る（る）は（は）ぶ（ぶ）ふ（ふ）ま（ま）て
く（く）ん（ん）ま（ま）の（の）わ（わ）りい（い）ろ（ろ）ま（ま）よ（よ）ま（ま）と（と）茶（茶）を（を）用（用）べ（べ）い

○一切の毒を消（一切の毒を消）よハ

黃龍湯（黃龍湯）

雪隠（雪隠）のつ（つ）ぎ（ぎ）れ（れ）飲（飲）て（て）よう
中（中）の（の）う（う）い（い）ち（ち）り（り）飲（飲）て（て）よう

蕪菘本草

○砒霜（砒霜）石の毒を消（石の毒を消）よハ

黒大豆（黒大豆）せん（せん）ト（ト）の（の）み（み）を（を）よう（よう）し（し）

肘後方

○酒肴（酒肴）多く過（多く過）し（し）て腹脹（腹脹）し（し）る（る）よハ

塩（塩）と齒（齒）ま（ま）り（り）て湯（湯）を飲（飲）べ（べ）い（い）如此（如此）二（二）三（三）遍（遍）と（と）れ
を雪（雪）れ消（消）ろ（ろ）か（か）ど（ど）く（く）腹（腹）多（多）く

壽世保元

○酒食（酒食）のわ（わ）りい（い）ろ（ろ）ま（ま）よ（よ）ハ

黒大豆（黒大豆）

或（或）ハ白大豆（白大豆）

半合（半合）つ（つ）み（み）の（の）ぐ（ぐ）と（と）く（く）せん（せん）ト

廣記

○酒（酒）を過（過）し（し）て嘔（嘔）あ（あ）り（り）よハ

赤小豆（赤小豆）煮（煮）て食（食）て（て）よう（よう）煮（煮）汁（汁）を（を）と（と）の（の）こ（こ）で（で）

食鑑本草

○酒（酒）の二日（二日）酔（酔）よハ

黒大豆煎トその心煮

本草

○又方

赤小豆あづきさんどの心び煮

本草

○又方

生蘿菈せいらかちりちり汁じゅう飲のてよく

本草

○燒酒しょうしゅう多おほく飲のてよく

病人びやうじんと寐ねさせてよく豆腐とうふを薄うすく切き取とり上へよく

本草

○燒酒しょうしゅう多おほく飲のてよく

病人びやうじんと寐ねさせてよく豆腐とうふを薄うすく切き取とり上へよく

本草

○酒しゅうと過として咳せきを止とめよく

石灰せっかいと醋すうととれと用もちひよく

本草

○又方

五倍子ごばいし 女のメノ心こころをとり上へよく

本草

○一切いっけつの魚いさなの毒どくにとり上へよく

黒大豆くろまめさんどの心び煮

衛生方

○河豚の毒よわたりし方よハ

胡麻の油のこしてより

本草

○又方

黒大豆せんどのみそより

本草

○又方

地漿水 日のうらうぬ地を二尺ほどかりてうん中へ

本草

○一切の魚は酔さるよハ

陳皮 人の 煎て飲てより

肘後方

○章魚蛤蜊烏賊 どれ虫魚の毒よわたりし方よハ

醋小茶碗よ一盃のこしてより

本草

○又方

胡麻油一盃のこしてより

本草

○又方

蜀椒食てより

本草

○又方

胡椒の粉のこしてより

本草

○蟹の毒よわたりし方よハ

紫蘇乃せんど汁のとしてより或ハ生ハ紫蘇

食てしより

医統

○卵トビ又雞ニトリの毒ドクよりとりとりよハ

醋酢のとしてより

医統

○鳩トビ食て毒ドクよりとりとりよハ

葛カラスノれ粉コ水ミヅのとしてより

医統

○又方

生薑シヤウカウ而シテ乃シテより

医統

○六畜ウシウマウツウ肉ニクを食て毒ドクよりとりとりよハ

伏龍肝フツリウカトノのヤハソラリよりキぬル乃シテのト

てより

千金方

○又方

小豆コウヂ黒焼クりシテ水ミヅのとしてより

千金方

○自死オノノミする獸ケモノの肉ニクを食て毒ドクによりとりとりよハ

古頭コウツ巾キ垢カウきぬ湯ユのとしてより

千金方

○諸菜シヤクの毒ドクよりとりとりよハ

人乳ヒトノチ童便ドウベン六七歳ロクシチサイのミのコ便ベンなりニ等ト分ベに合ハて

のくそやう

海上方

○一切の毒の毒よわりやう

小便のよきやう

時後方

○又方

地漿水

地漿水 月あわらうさる地を二尺たきとり堀て其中へ水をあつこふう切しやう

のみてやう

本草

○又方

金銀花

よいぶらの
らなたり

子ろくく
ちん

のよきやう

己志

○柿李薄薑束 柚林檎挑梅惣し一切の菓子に

毒よわりやう

胡椒の粉白湯よとのびやう

道藏經

○一垣類の毒よわりやう

生蘿蔔のやう汁のよきやう 或ハ食て

よきやう

医統

○豆腐の毒よわりやう

生蘿蔔のやう汁のよきやう 又食て

よきやう

各医類案

○茶を多く飲りて腹脹らむは

醋をのとしてより

物類相感志

○一切の薬に毒はあむりたりは

生姜食てより

千金方

●痰

○一切の痰證は

塩湯のみてより

外臺方

○痰切れぬるは

浮石粉して白湯を飲より

本草

○又方

○五倍子

女のふらりつらと

白湯をのとして

本草

○又方

生姜をりきき白湯をのとして

本草

○水

のやうなる痰出りは

本草

○艾をぬ常はよく煎て用たり

本草

○一切の痰證久しく愈ざらば

○又方

生姜薄く切焙粉にして糯米に食して丸
食の湯にて用てよう

癸志

○小兒咳嗽やまぶらよハ

生姜四拾目湯にてせん、其湯にて行水

千金方

●瘡

○瘡 毎月又ハ日まぶらよ發よハ

生姜四々汁を絞椀よ入一夜外へ出て

夜露ようくせて其翌日早々に此の方よ
ひて飲べ、其日落どハ再飲を

易簡方

○又方

生姜の絞汁小茶碗よ一盃飲てよ

明医雜著

○又方

狗蠅一疋頭と翅とを除去蠟よて丸ト
發日乃朝冷酒よて飲てよう

医方大成

○又方

常山と木の芽を
茶碗よ水二こへ入

一といふせんと用てす

医宗必讀

●痢病

○大便血まじりて下ゆま

塩を紙に包わくならむど焼てまじり

て粥よいせ食てより

急救方

○又方

五倍子つらつら五分生又五分八分黒

燒まして已上を水にて丸と赤くくま

温酒よてのみ白痢よハ水と酒と等分に

合てのみ水めぐく下りまハ食の湯よて

のじべー合集靈

○赤白下痢よハ

切心白粥の中へ入てよく煮てく入て

より食医鑑

○又方

生姜を多く艾五分つひれくくせんト

のらいてより医統

○赤白下痢又ハ泄瀉或ハ心腹のいくと痔血

とほり方

艾きる 生姜三分 醋と水と等分ふんに
一ていよせんト用てりよ

医統

○痢病不食をりよハ

山藥五分生又五分ハ炒二色とにつこ
くこ食れ湯よてのびせ

衛生易簡方

○又方

糯米半合生姜のちり汁少し入炒粉ふよ
して白湯よて用ては

魚日府禁方

○又方

梅子をツ核を捨上々れ茶をみとこみ合せ
醋と湯と等分よ合てのこては

医統

○又方

上々の煎茶のこてより

孟詵本草

○痢病愈て後不食すりよハ

赤小豆煮て食てより

医統

○小兒の痢病よハ

雞子湯よ煮て白こと捨黄子としら

ぐらりぐらりぐらり生姜のちぢり汁にて用す
種香仙方

●泄瀉

水のどろろとゆるゆるなり

○他國へゆきて水うつり或ハ旅の中に腹をさ

すハ

鞋の底よりぬりぬり土と水よりさた

藏器本草

○暴入瀉痢すハ

百草霜

びくまの

食れ湯よてのど

續十全方

○又方

艾も又生姜三分つこのどろろせん

生生編

○夏の中水のどろろ腹をさすハ

五倍子女のどろろ時粉にて白湯

余居士選奇方

○小兒腹下と腹くく大さちりハ

多く垢の付る着物と四五寸切て水

て常のこくせんと用下

千金方

●霍乱

○霍乱吐瀉 痢せせざらよハ

地漿水

比と二尺ありやうしてその中へ水と入らさよううりしるまう

小茶碗

二三盃のみそてより

千金方

○吐瀉下痢とらよハ

釜の底ハ墨五分 竈の口ハ墨五分 白湯と

至極熱して酌上くするる百度して

彼二色ハ墨と入てのこては

經驗方

○又方

屋根裏へ下つてら煉五分 ぐらりあつて白

湯こそのみそてより

衛生易簡方

○又方

道に捨ら破草鞋一そく鼻緒の所と一寸

ぐらり切捨水とて二三度洗てのら湯とて

せんとのびべー

事海文山

○腹痛て吐瀉痢せせざらよハ

塩湯と多くのこてより

本草

○又方

塩とわらう炒て布に包肢背とわらうては

救急方

○又方

生姜をぬ水とを常飲とて煎用ては

肘後方

○又方

石灰五分醋とて飲てより

摘玄方

○吐逆

糯米粉にいて水とを飲べし

医統

○又方

艾もぬ水とを常飲とて煎用てより

古今医統

○乾嘔

薤葉水とを常飲とて煎用てより

千金方

嘔吐へまづさわりて吐逆とらむ

○嘔

白胡麻をぬ胡麻油茶碗と二といへ一といへ

述効方

○又方

生姜をぬ醋茶碗と三盃入一盃煎用ては

食医心鑑

○又方

ひねの粟一合生薑のちぢり汁茶碗一盃水茶碗
一盃入一盃入こいれいれいちぢり汁用べし

心鑑

○又方

陳皮ちんひみんの四分生薑八分水茶碗一盃入一盃
一せんトのちぢり汁

仲景傷寒論

○乾嘔くわんぐいのちぢり汁

生薑食てよし

心鑑

●嘔

○嘔病おうびやう發て食物通くわんぶつせせぶぶりりよよハ

伏龍肝ふくりゅうかんうまとの下れくわんの下の
湯ゆまてまてていいくくののびびべべー

百選方

○又方

芥子の粉酒かいしよまてまてて毎まい日にち一いっふふづづ飲のむべべー

千金方

○又方

生薑しやうかう粥じやくまま煮にてて食くててよよし

兵部手集

○又方

昆布こんぶ五ごふふろろくく洗せん小せう麥ばく二に合が水すい茶ちや碗わん一いっ盃はい入いれ

煎ド小麦こむぎろく煮にる時汁ときじゆをのびべー又昆布こんぶ一切いっけつ
口くち入いれて常じょうは昆布こんぶ味あじをのこしびべー

医統

○又方

高年こうねん炊米すま 共年きねんの行ゆきる道明寺だうめいじ 急きゆうなる流川りゅうせんの
水みづまで粥かゆのこく煮にて上湯じやうとうを飲のべー

医統

○又方

生韭せいさいのころり汁じゆ毎日まいにち小茶碗せうぢやうわんよーといぢり
のみてうー

名医類案

● 呃逆いづぎやく ちやくりのころり

○ 呃逆いづぎやく やまのころりよー

帚しゆ燃もを鼻はなへ嚏くしゃみしてうー

聖經

○又方

生姜汁しょうがじゆ背せよぬつしてうー

本草

○又方

竹筍たけのこ 竹たけのころりをけぶりけぶり 湯ゆよてちへー
のりひてうー

本草

○又方

柿かき帯おび 梅うめ干かきのつころり 水みづ茶碗ぢやうわんよ

一盃入六分よせんども用也

医統

○又方

川椒の粉醋くわてうのこなすとく丸白湯くわじやくまで用てよ

医統

●吞酸くつさん すこからびめらととあやういあり

○醋すら、ちんびひ出てやまらりよハ

生蘿蔔なまごぼうとびく食てよ

集簡方

○又方

頭の垢水かぶのあかみづよてのみてよ

本草

●饅まん雜ざつ ひねのくくまひあり

○胸むね心こころあきさよハ

醋す小茶碗せうぢawanよ二盃ふたひのみてよ

本草

●氣鬱きおく

○氣きの鬱おくし、くろよハ

赤小豆あかあずき煮て食ハ氣きと散す

本草

○又方

黒大豆くろあずき煮て食て中ちゆうと調氣てうきを下くだし

本草

○胸むね冷ひやて氣きのわらよハ

生薑なまがしやう食てよ

本草

○又方

蜀椒食てう

本草

○又方

蘿蔔食てう

種杏仙方

●痞

ひのろのつるえあり

○心腹痞着て痛くするんとすりよハ

塩を水とせんでのびて

梅師方

○卒に腹痞着てハ又痞よハ

菲の汁のそてう

唐韋迪獨行方

○飲食して腹痞よハ

正しくかこまり引息を脘の下まて

け又勢息を脘の下まておすのれ

よ四十息とれを愈

病源候論

●鼓脹

大よるるやまのり

○腹腫て大よるりたけバ鼓のぞく鳴よハ

蒜の根皮を去て綿よ包なりあつ

炒て大便道へ入冷まハ又易炭度も入て

りし大便通せざる病よめつこの

どくしつてう

衛生易簡方

○又方

生姜をわづく火をあぶりて綿につみ大便

道へ冷れん又うてつうめ入ては

梅師方

●水腫 一身しくくくれろ病なり

○五體手足悉腫るるよハ

黒大豆茶碗よ一盃水茶碗よ五盃酒茶碗

よ五盃入三盃煎用てう

千金方

○又方

黒大豆水よ煎用

范汪方

○風腫よくれいさびよハ

牛房ハ實も白湯よ飲

聖惠方

○足腫るるよハ

葱のせんど汁よてう

漬洗て

韋宙獨行方

○率に陰腫るるよハ

牛の糞黒焼よして酒よてけけて

梅師方

う 乾バ又つてう

●積 ひょうろくにせきまらありていじあり

○胸腹せうぶくは積しやくのくまらありて痛いたまハ

○又方 毎日まいにち醋す少すこづつのとてよく

本草

○又方

昆布こんぶと常じょうよ食くてよく

本草

○又方

蜀椒しやくか食くてよく

本草

○又方

浮石粉うきいしこなけて白湯さかよて飲のてよく

本草

○食物じきをて積しやくとなり痛いたまハ

●梁上塵りやうじやうじん やほの下にけこの飲のてよく

本草

●黃疸わうたん せが黄より病あり

○一身いん皆みな黄わうより小便せうべんす黄わうよりなりまハ

○又方 生姜しやうがよて惣身そうみとすべいつととなく

黄色退わうしやくたいさ愈い

傷寒きやうかん極ごく法ぽう

○又方

乱髮らんぱつ 男女なんにょのぬけけより黑燒くろやきけてまなつ

○又方 毎日まいにち水みづよて服ひくべい

時后ときご方ぽう

○又方

柳の木をえんどのひびく

外臺秘要

○又方

梅樹根粉にして酒よて飲む

食療本草

○又方

蘿菔實粉にして白湯よて飲ては

古今医統

○又方

生蘿菔炒粉にして式々づて白湯よて
用てより

赤水玄珠

吐血 血をくくまり

○吐血やまがらよハ

伏龍肝 下のやけつらう 粉よしてもむ
水よてのろてより

廣利方

○又方

鍋墨水よてのろてより

濟急方

○又方

艾水よてえんどの用べり
鯁血 鼻血のせり

千金方

○鼻より血出て止むるは

花よりおどたの足と水よひう右より
おどた足をはいてう

本草

○又方

伏龍肝くわていけん 下くだのやけつりつり 液えきをも乃水よて
のみてう

廣方

岸友暎

○又方

百草霜ひゃくそう 糯米もちを煮にる湯よてのみてう
まらにとり

劉長春經驗方

○又方

艾水あゐすいよてせんどのみ或ハ鼻のわさへ
艾煎汁あゐせんじゅうを入筆いれひつの油よて吹ふては

聖惠方

○又方

五倍子ごばいし 女めのくぐろつくろつ 鼻びのわさへさ
いきてう

衛生易簡方

○又方

生蘿蔔なまごぼうのわさ汁じゅう鼻びの孔あなへよこ入
てう

壽世保元

○大便だいべんのあつとさうに血ち乃のはゆはハ

百霜草ひやくしやうそう 式しきを食くの湯ゆにいれ一いち夜や印いんへ

出いして夜よ露るよさうし 翌あした日ひ空くわ心しんよ

服くわしてし

邵真人しやうじん經驗方きんげんぱう

○又方

艾あ生せい姜きやう 等とう分ぶん水すいよてつひのごとくせん

りらひてし

千金方せんしんぱう

○又方

五倍子ごばいし 食くの湯ゆよて

全幼心鑑ぜんけうしんかん

○又方

黒大豆くろまめ 炒あ焦せう粉こなよして酒さけよ入いると

煎大豆せんまめを去いて酒さけより飲のては

活人心統くわつしんしゆ

○又方

小豆こまめをぬ粉こなにし冷ひやあし用もち

梅師方ばいしぱう

●諸血しよけつ

○懸けん身みの毛けの敷敷より血ちおして止とまりハ

一身いつしんの中ちゆう何なん方ぱうありとま

生薑のちり汁のこしり

奇疾方

○又方

乱髪くらのがら 黒焼くろやき よしつぎつぎ 又少計すくじ

鼻の孔へ吹入てり

醫治要訣

○口鼻耳前陰後陰より一度血ありまハ

生薑蘿蔔のおろし汁 茶碗よこしのこし

くらすくらす

謹治唯編

○一切の吐血まハ

乱髪くらのがら 黒焼くろやき けりて水よて

聖惠方

●小便血のみにて 痛いたく小便せうべんは血ちありなり

○小便の後血ち出でるまハ

乾柿かんし 黒焼くろやき して食くの湯ゆ

よてのみてり

医統

○又方

胡麻ごま 式々粉しきしきこな にて水茶碗みづちawan 二ふた 盃cup 入い 浸ひ して

翌日早朝あしたのあさ 成程なりほど 熱あつ く暖あたた のみては

千金方

○又方

醋茶碗一盃塩五分煎飲ては

廣利方

○又方

五倍子女のくろくろしる母梅干の肉よこぬ合せ酒

よて用てしり

●汗春秋冬のあつくしきとき時々の以て

集簡方

○一切の汗よ用てしり

小麦黄色よ炒て五分椒目五分水茶碗よ

一盃半入七分よせん一夜外へ出一夜よ

救急方

○又方

五倍子女のくろくろしる母津よて移り頭の中へ

一盃入紙よて

集聖

○目の覚てある何汗出り

糯米黄色よ炒粉よし布袋よ入汗のか

道藏經

○盗汗やま

既よ寐と胸少腹とりと焼

餅をり飲て湯水とのますずて卧とせ

○狂乱してわがぐまハ

伏龍肝くまの下の灰の粉よしてそを水
よてのみて

千金方

○又方

人の屎くまの黒燒して酒よて用じ

千金方

○又方

鐵漿女のつろ茶碗よ一盃用ては

医統

○笑て晝夜やまど狂よハ

鹽をよどわくなりど燒て河水よて

儒門事親

○一切の狂氣よハ

鼻の下ハ溝の真中よ北壯灸とれハ忽に
正氣よりたよ圖わり足合せ

医統



●癩俗よ云くつらやとり

○癩症ちりて久く成りハ愈ぬのかりじ
初て發らるハ兩のひれ大指を二指一所よを

てくくつと二女の指の爪と歯とよの四所へくくつ
よ灸すべし一丸は圖わく見合なり



い黒の下灸すべし

医統

●健忘 物忘れし病なり

○うくくと物忘れし病なり
石菖蒲の根毎日食てす

医統

○又方

戊子日 桃枝二寸切て枕の中へ入置て枕よ

聖惠方

○又方

七月七日蜘蛛一疋とりて我衣裳の間又ハ
衣裳と入り箱にぐれ中へ入置て人よえり
をふりてぐれ火目ぐりりの後一切乃奉

聖惠方

●敬馬悸

くらまのりやましおどろく病なり

○常

物わびえし何とぞ恐しきやうなりハ
胡麻油毎日少宛のてす

本草

●不寐

神しとぬ病なり

○何のゆゑに寝られざるやハ

燈心水にて枕の下にひたす

集簡方

○晝夜ともに寝られざるハ

新に布切を火にて焚くわづら目の工を

いと細かく又大豆をわづらひて袋に

入枕をよして寝れを其まゝ寝らざる

枕の中へ大豆を冷れぬ又入してわづらひて

二三日如此を繰り返すと愈

肘後方

●邪祟

○一切の邪鬼妖魅野狐のたぐひをいととらぬ

やまひま

桃奴 桃の木の梢を落としてスー、粉にして

酒にて用てり

医統

○又方

おのれ大指二枚を酒にて煮ゆ

灸の仕やう 卅四丁目

圖わり足合をい

○又方

空よ向ひて 𦰇如此指よて 書をー九龍

符よのふ是ちり早速ー

種杏仙方

●小便濁 小便の濁る病あり

○小便白く濁るよハ

冬瓜の實炒て粉して空心よ白湯よ

道藏經方

○腎虚して小便濁るよ

蕪の實炒粉よして食前よ酒よてのふて

聖惠方

●遺精

寐て居る内よ精のりたり

○男女ともよ夢をて見て精汁泄るよハ

蕪の實生よて朮粒空心よ塩湯よてのふ

藏器本草

○腎虚して夢よ精泄るよハ

蕪の實式々少して炒て粉よして食前

大平聖惠方

○又方

酒よてのふて

山藥ヤマノイモをハ葱ネギ白シロ五分五分塩シホ少少し已上以上三色酒三色酒に
中ちゆう入いれよく煮なゆる時酒とき酒もに飲のては赤水玄珠赤水玄珠

●淋病

○熱淋ねつりん 腹の中はらの中はぬつわうてり血淋けつりん 小便せうべんは血ちをて流痛ながむ

○赤小豆あかづき三分三分炒粉炒りこよして葱ネギ一本一本酒の中酒の中は

○入煮爛いれにくのみてようし 修真秘旨

○急淋きゅうりん 陰腫いんしゅ 入りよいい 葱煨ネギ杵爛きりして時れ上上付付てはし 外臺

○小便せうべん流痛ながむよいハ

葱ネギ白皮シロ赤アカを一寸一寸切きて時ときの上上よとここてせ

壯い灸ましてようし 經驗方

○石淋せきりん 小便せうべんの中中より砂すなのごととり物ものいづかいり

○浮石粉うきいしこなにて水醋みづ等と分ぶんよいれこく

○又方 せんと用てようし 傳心通用方

○乱髮らんぱつ黒燒くろやきよして水みづよて用ては 肘後方

○血淋けつりん 竹茹ちやくじよ 竹たけの青あおささ波なみをけぐり捨すて 五ご々々水みづ茶碗ちawanよし

○竹茹ちやくじよ 竹たけの青あおささ波なみをけぐり捨すて 五ご々々水みづ茶碗ちawanよし

○竹茹ちやくじよ 竹たけの青あおささ波なみをけぐり捨すて 五ご々々水みづ茶碗ちawanよし



二盃入一盃は煎空心は用いば

集驗方

○老人の淋病はハ

小麥拾五燈心五分水茶碗は二こい入一

奉親書

●遺尿

小便たるくもり

○寐て居る内は小便あつとさうざらよハ

白紙を枚其病人の寐る下にさうせと寐

うせとの白紙は小便くろやういして翌

日取出し黒焼はて酒をて用ては

医統

○又方

五倍子女のこもろつらつら時五分皮五分黒焼

はして已上を粉にして糊よて丸ト食

嬰童百問

●小便不通

小便通せざり病なり

○小便通せざらよハ

梁上塵やねの下の垢の二撮さうりとせら

外臺秘要

○又方

しそよう

濡らる紙に塩をつき成程よく焼て少許
小便のおろすへ吹入てより

普濟方

○又方

葱白一把炒わくくして臍の下と度く

本事方

○小便なくおんぞうておど痛もハ

古き筆の毛の取づり黒焼け水

外臺

●大便不通 大便ついでせざるなり

○大便通せど心わくさよハ

胡麻米と等分合粥煮て食バ通

肘後方

どらりかり

○又方

蜜五兩銅鍋よてどらくと炒つめか

まのりしり時かどくすりめ尻の穴の内へ入
とくべー大便通せんともふを出来しり時

仲景傷寒論

の蜜をのくを

●大小便閉

大便小便不通せざるなり

○雄鼠屎

雄鼠屎ねむしを粉こなにして臍へその中なかへ水みづ

よてつれぬを忽いっせう通とほざるなり

普濟方

○又方

鹽しよと酒さけよてとと臍へその中なかよつつけ又鹽水しよづいを

臍へその穴あな中なかへ少すこし吹入ふきいれ又鹽水しよづいと少すこしのひ

をを妙まうに通とほざるなり

家藏方

●痔

○痔ぢをぢりて痛いたままははららももハハ

胡麻ごまと煎せんし洗せんててりり

本草

○又方

○五倍子

五倍子ごばいしを煎せん洗せんててりり

直指方

○痔

血ち出でりりよよハハ小豆あずきを酒さけよて煮酒にを炒ありりて乾時粉かんじこなを

して酒さけよてのひひべべりり

肘後方

○又方

葱いも白湯しろゆよてせんせんどどぢぢ洗せんててりり

外臺

○又方

鱗を煮て食てよし

食医心鑑

○又方

樞の實つゝは食てよし

経験方

●脱肛 尻の穴をれが痛病なり

○脱肛痛甚し

梁上塵 やねの下の粉の鼠屎二色を火よ

濟急方

○又方

石灰煖く焼縮まつみ其上に座して

聖惠方

○又方

五倍子 女の毛をうつらる付 百草霜 等分粉り

て醋よてとらさ鳥の羽よてとらさ

普濟方

○痢病しつゝは脱肛出らるは

塩とあつて炒て焙よつみそのへ座し

時後方

●虫症 しり腰のゆかり

○虫腹を痛め顔の色白く唇赤く口より水と吐くハ
艾三白常れごくえん用てり
時後方

○又方

○小麥の粉白湯よてのみそり

本草

○又方

○蜀椒酒よてのみそり

本草

○又方

○樞乃實酒よてのみそり

本草

○又方

○鹽湯のみそり

本草

●頭痛

つららの痛り

○一切の頭痛

○生蘿菔のちり汁少りづり鼻に孔へ吹

へてより右をり痛まハ右の鼻へ吹入丸痛

まハ左の鼻へ吹入丸痛まハ左方

加宜方

○又方

大豆よく炒て酒よ漬又大豆を湯煮し

女方等分よまじせありを毎日七日

千金方

○天間くいてより

○飲酒頭痛とりよ

竹筍竹の葉と皮とけらる 五女雞子鶏子の

千金方

○腦痛よハ

桃の葉と多く集て枕よふてハ

睡齊問覽

●鬚髮鬚の いげのやまみかり

○白髮白髪 抜て黒くせんと心

生姜の皮拾々胡麻油よそ 煎泥の如 白髮ぬけら 白く三日後

蘇頌圖經本草

○髮髪 と黒くせんと心

油と 醋と 等分よ 合黒大豆と 煮て 煮ら 時黒大豆 と取出し 油と 煮ら 煮ら 時黒大豆 と取出し 油と 煮ら

のうらに髪も 黒くなり

千金方

○又方

乱髮男女の髪 洗つて 胡麻ゴマの油あぶらよて
せんどつめ 乾時あせ粉こなりて 油あぶらよて 移うつりて
髪かみよつらんを 髪かみよく 髪かみよく 髪かみよく

聖惠方

○又方

槐子アヲ ろんごの 実みり 常つねに 服くはハ 髪かみ髪かみ白しろ
髪かみかく 年とし老おいても 髪かみよく 髪かみよく

梁書

●面おもて そのやまひり

○面上おもてよ 出来できら 諸瘡しよそうよハ 諸瘡しよそうよハ 諸瘡しよそうよハ 諸瘡しよそうよハ
胡麻ゴマ嚼くて つけて 油あぶらよて 移うつりて

外臺

○又方

艾アハ 武ぶの 醋すよて せんどはめ 汁じゆを 貼はて

御藥院方

○面搔おもてやがり 疣うぶつさ 油あぶらよハ

生姜シヤウキヤウの 汁じゆよて 白粉シロコと 擦こつりて

医学六要

○面おもてよ 疣うぶ目めのお 出来できら 油あぶらよハ

艾アハよて 三壯さんすう灸しゆて

聖惠方

○腮腫さいしゆ 油あぶらよハ

赤小豆粉にして醋にて塗てよし

赤氷玄珠

●耳

○聾耳汁ありよし

伏龍肝

下れ灰の綿を包て耳へ入さ

目よ二度入てよし

聖惠方

○耳腫痛よし

五倍子

冷水にてととぬるべ

のたまりりえれりよし粉にてうろく

海上名方

○聾耳膿生るよし

五倍子

耳の中へあさ入て

普濟方

○又方

故綿黒焼よし綿よほくみ耳の中へ

聖惠方

○耳鳴或ハ平に痛よし

塩わさめひし枕とてぶし冷れをう

時後方

○耳痛みみいたよハ

砥いよて小刀ことうを磨石とぎ砥いの上うへよ黒くろくくかりかりりり鉄てつ

氣けの水みづ少すく耳みみ中なか入いててりり

赤水せきすい玄珠げんじゆ

○一切いっけつの虫耳むしみみの中なか入いららりりよハ

胡麻油ごまのあぶら少すく耳みみ中なか入いててりり

医統

●鼻はな

○風氣かぜししかかくくて鼻塞はなづまりららりりよハ

梁上塵りやうじやうじんアアのの下した柙あしの上うへのの鼻はなの中なか入いららりりて

普濟方

○又方

釜かまの底そこに墨すみ五分ごぶん水みづよて飲のててりり

普濟方

○鼻はなの中なかより小指こさしののどどくくちちりり物もの出い出で来きてて痛いたよハ

釜かまの底そこの墨すみつつけけててりり

千金方

○鼻はな赤あかくくちちりりららりりよハ

常つねに塩しほめめぐぐりり付つててりり

直指方

○何なにの事ことししかかくくて鼻柱痛はなつらぶよハ

琉黄りうわうちちりり粉こなりりて冷ひや水みづよて

澹寮方

● 口舌 口舌の病あり

○ 口の中一切の瘡腫物よハ

○ 五倍子 女のみろくろく時 どのせよ

龐氏傷寒論

○ 口の中悉燻て痛よハ

○ 生蘿菔れちぢり汁よてくびく 口嗽て

瀕湖集簡方

○ 又方

生姜のちぢり汁よて口嗽てより 又少

本草

○ 舌より血出りよハ

小豆粉りて水よて煎て飲てより

肘後方

○ 卒に舌腫て痛よハ

釜の下れ墨酒よてとらりてより

千金方

○ 小兒口瘡よハ

琉黄 水よてとらりてより 又方 ぬの肉

危氏得効方

● 牙齒

○ 齒齦より血出りよハ

百草霜とらりついでり

集簡方

○又方

五倍子女のくろくろくろく用黒焼いりてはくれば

くらまらりやじ

衛生易簡方

○牙痛ハ

壁土粉いりて塩等分ハ入りく炒右痛ハ右

の鼻の中へ吹入左痛ハ左ハ鼻の中へ入り

入て右の

普濟方

○又方

胡麻をる水とてつのくせんいハ

含嗽ハてり

肘後方

○又方

黑豆一撮葱白三本艾一握川椒四十粒水茶

碗ハ二盃ハ一盃ハ煎暖嗽ハてり

医統

○蟲ハ齒痛ハ

艾を火にて焼其煙を鼻の中へ入口り

其煙を吐出ハてり

普濟方

○又方

鼠粘子ねじり炒水あぶりとく煎くトくくく嗽くして

延年方

○又方

石灰いし砂糖ざとう等と分ぶん蟲齒ちゅうしの孔あなの中なかへ入いて

普濟方

○又方

石菖蒲せきしょうぶの根ね咬爛くわらんしてく蟲齒ちゅうしの孔あなの中なかへ入いて

医統

○又方

絲瓜しきわ黒燒くろやきして粉こなにして擦すりはけして

医統

○牙

齒はにくハハ或あるハハうささりよハ

黒大豆くろまめ酒さけよそてえんどくびくく口くちよく

周密溥然瘡抄

○又方

赤小豆あかあじ粉こなりて齒はよこらりめり又ハ

家寶方

○唇くちびる列ら衣いいいししよよ

青皮 ミカドの樹皮 くらやこりてつり

医学六要

●眼目 目のやまひ

○眼暴赤腫痛赤腫痛よハ

百年已上の古銭古銭よて生姜生姜とこまげて古

銭の耳耳よ汁汁をついで眼眼よまもりついでよ

私云百年以上の古銭とハ大方より
數年より年の浅きをえればより 宗奭本草

○又方

豆腐湯煮豆腐湯煮して眼の上眼の上にのせのせての

本草

○眼腫火火の火くわめさひくわめさひよハ

焼酒焼酒よてわろへてよ

本草

○又方

黒大豆煮黒大豆煮てくろりよ入眼胞眼胞のうへうへがてあ

本草

○眼何何と何く痛痛よハ

布切布切を湯湯よ浸浸わてめ眼胞眼胞の上上をとろてあ

本草

くろり又大豆大豆と蒸蒸わつてくろりよハ

枕枕とくろり

聖惠方

○ 涙多く出るよハ

塩と眼よりとりつけ冷水にて洗は

范汪方

○ 眼赤く涙多く出るよハ

女の乳ととりつけよう

本草

○ 眼の中に昏出来るよハ

塩ととりつけよう

直指方

○ 倒睫痛よハ

毛をぬき捨て血を擗て人の身より

本草

○ 小兒目の中よ昏出来るよハ

燈心と塩を付て目より取り去るよハ

活効口議

○ 雀目よハ

地膚子と剪同と洗てよハ

本草

○ 又方

生姜の末かり汁にて洗てよハ

医学六要

○ 又方

焼酒にてあつめてよハ

医学六要

喉のどれやまひあり

○咽喉一切の痛は

胡麻炒粉にて白湯を飲せよ

三因方

○喉腫痛食のたまみめくさよは

蕪杵くさく項上みつげてよ

医統

○喉痺よは

足の三里を灸せよ
三里ハひざのつらより
三寸下をいふなり

類經

○又方

醋のみてよ

萬病回春

●瘰癧 ちぶのしり

○一切の瘰癧は用金一

牛皮油鞋底のり

黒焼りて胡麻油

集玄方

○又方

上々昆布よくわらひ塩氣のうさやう小

して醋まつけとさ口よしくと辭し

てハ又含みてよ

医林集要

●腹痛 ころれきこり

○卒に肢痛よは

...

○桂のたれ石の上のやうりれやうけうとある
すそのみでうー
藏器本草

○又方

白砂糖をる酒茶碗二二盃入二盃も入ト

子母秘録

○又方

塩湯多くのみでうー

古今医統
道藏經

○又方

胡椒わろと酒すそのみでうー

食療本草

●脇痛

脇腹の痛み

○右もてしをすてし脇腹痛よハ

黒大豆或る炒て酒茶碗二二盃入一盃

肘后方

○又方

葱もてしをすてし並もてし菜もてし

湯もてわつくわころ痛止と射入接ては

●腰痛

腰の痛み

○腰痛て起居し難よハ

五

胡麻香油こまごまあぶらを炒粉あぶらこにして温酒ぬるめさけ或ハ生姜湯しょうがゆにてのせてよく

千金方

○又方

黒大豆くろまめ五合ごごう水みづを煮くわつかりとこりより時とき代しろははふふ痛いたふふああそそくく熨ぬてよく

延年秘録

○腰背腫痛こしせきしむりは

芥子粉カイシコ酒さけをまくく貼はてよく

摘玄方

○何なにととももををれれどど腰痛こしは

香油あぶら 胡麻こまの油あぶらをくりく飲のてよく

南史

○懷妊くわいにんの女に腰痛こしは

大豆酒だいずさけをく煮くてよく空心くわんこころのくてよくは

心鑑

●疝氣せんき

○一切いっけつの疝氣せんきは

塩しほをくりくややくく熨ぬくく炒あげく縮ちぢまくつくみみ痛いたふふ心こころとと熨ぬてよく

玉機微義

○又方

葱白むしり一握ひとつかみ泥どろのくくく杵きねくくみみ麻あしのくくくをくりく灸くすくてよく

玉機微義

○疝氣發して心腹腰痛ハ

胡桃黑燒ハして酒ハをそのとては

本草

○疝氣腰痛ハ

雞子ハ黄ハを白湯ハを飲ハては

本草

○又方

赤小豆ハをハのハをハ煮ハて食ハく

とハ

本草

○常ハ疝氣ハあハつハ人ハ女ハは會ハて陰囊ハへハくハ痛ハむハとハくハ死ハしハとハりハはハ

竹筍

竹ハのハ筍ハをハ水ハでハ煮ハてハ食ハくハ

医学入門

○小兒ハ乃ハ疝氣ハは

胡桃ハをハのハみハてハりハ

本草

婦人門

●經閉

豚水ハのハ通ハせハらハるハりハ

○經水ハ通ハせハどハ二三箇月ハはハありハてもハ通ハせハらハるハは

牛房ハをハ細ハくハ剉ハてハひハ袋ハをハ入ハ酒ハ中ハにハ五日

浸至毎日空心酒の心びへー 普濟方

○經水二三年も通せずと腰肢痛寒熱往來するは

芥子の粉式を熱酒よく食前よのこて

仁存方

●血崩

月水よのこにちびくく通し

○經水來よちびくく通しとやまざらよハ

乱髪くまらり綿等分黒焼あて百草

霜等分よ合わくく酒を飲よ本草

○又方

椒目酒よてのみそよ

證治准繩

●帶下

ちりちりちりちり

○赤白帶下よハ

大豆酒よくえんどのみそよ

心鏡

○又方

椒目粉よて酒よてのみそよ

本草

○又方

糯米蜀椒等分粉よて糊よ醋よまぜて
丸よのこてよ

本草

○又方

蒼朮粉雞子清（各五錢）とせ丸（各）として五十粒（各）づ

白湯（各）として用（各）て（各）より（各）

種杏仙方

○又方

竹茹（各） 竹のちりこ皮をきづりて少（各）し火（各）として

わがり粉（各）として一度（各）もを（各）ま（各）づ（各）て白湯（各）は（各）て

普濟方

●産前

○懷妊の内（各）は風引（各）ら（各）ま（各）ハ

伏龍肝（各） けまぶりの下の灰のトれ（各）き（各）ぬ粉（各）は（各）て

傷寒類要

○懷妊の内何（各）と（各）も（各）り（各）と（各）に（各）肢痛（各）ハ

塩（各）一撮（各）赤（各）く（各）焼酒（各）として飲（各）て（各）は（各）し

産寶

○懷妊の内腰痛（各）ハ

艾酒（各）として（各）せん（各）ど（各）の（各）と（各）て（各）より（各）

子母秘録

○懷妊の内（各）は下血（各）や（各）ま（各）づ（各）ら（各）ま（各）ハ

艾酒（各）として（各）せん（各）ど（各）の（各）と（各）て（各）より（各）

時後方

○懷妊の内（各）は経水通（各）じ（各）ら（各）ま（各）ハ

○赤小豆粉にして酒をそきむ宛飲ては 千金方

○胎内れ子動て胸まどつさ上げ痛よハ 子母秘録

○艾醋あしすすてえんどのみそてより

○又方 千金方

○梁上塵りやうじやうじんのやりのやりの下れ桁たての上の竈突墨かまどつげ 千金方

○胎内れ子哭よハ 千金方

○鼠穴土一握水ねずまなほすてのみそてより 種香仙方

○又方

○胎内の子動て下血げけつとらよハ 丹臺玉案

○葱白十本水しゆびすて濃えんどのみそてのひぢぢ

○子胎内こたいないすて死しとれを自出みづいづ又また死しとれを

○何なにのゆめししをくくまづまづまるまる一度いちどのみそて効き

○くハ再またのひぢぢ

○六月七月乃比胎動ろくがつしちがつて痛いたまのいいくくよハ 深師方

○葱しゆび白水びやくすてえんどのみそてより 楊氏産乳

○又方

○胎内の子動て下血げけつとらよハ 丹臺玉案

○葱白十本水しゆびすて濃えんどのみそてのひぢぢ

○子胎内こたいないすて死しとれを自出みづいづ又また死しとれを

○何なにのゆめししをくくまづまづまるまる一度いちどのみそて効き

○くハ再またのひぢぢ

○六月七月乃比胎動ろくがつしちがつて痛いたまのいいくくよハ 深師方

○又方

鯉と煮て食てう

種杏仙方

子墮と一々血下ろま

五倍子 其のちろろろろとさ 式を酒とてのみ

朱氏集驗方

懐妊八九箇月れらる腕の内動て子生れんと

とらよ

梁上塵 其のちろろろろのよの 釜底墨 釜底の

本草

○胎ありとやとく一人も二人も産りくらくあると

懐妊して又墮胎するまて腹心わくさよハ

赤小豆をう粉にして酒とて用む 千金方

○横産或ハ逆産よ生れんとするまハ

伏龍肝 其のちろろろのトウ 其のちろろろ

酒とてとさ母れ臍の中につけては 救急方

○逆子よひまねんとするまハ

ゆれ中指よ釜のちろろ墨をわくつけて 千金方

○横産逆産横産逆産生れんとす生れんとすりよハ

梁上塵梁上塵やねの下やねの下にによよる酒る酒よよくののみみててさ

つつそそくく平産平産とと

子母秘録

○逆産逆産よよ生れんと生れんとすすりよハ

塩塩ととよよにに付付てて母母のの腋腋又又生生るる子子乃乃足足の

子子にに貼貼てて血血をを換換ええるる

千金方

○又方

其父其父の名名ととせせるる子子にに足足乃乃書書をを

種杏仙方

○子腹中子腹中ににてて死死すすりよハ

伏龍肝伏龍肝下下にに貼貼りり酒酒とと飲飲下下十全博効方

○又方

大豆醋大豆醋とと煎煎ドドのの心心をを

産乳方

○子子生生れれりりよよハ

赤小豆七粒赤小豆七粒生生ととのの心心へへ催生薬催生薬ととをを妙

産寶

●産後

○胞胞ちちりりごごろろよよハ

加賀國全澤
鳳岳宮庄氏
之塾鶴林堂
岸友勝之印

家の中此桂のむら石すえのふれやうりうのう
かりとまきと雞子の清とてとととてのじべー
そのまうかりう

本草

○又方

其産婦の二布そのふたふた井戸の上いどのうへに引込ひきこむその

千金方

○又方

産婦の居て居る忌物と竈の上かまどにうぐいすを忽たちまちかりう

千金方

○又方

大豆酒まめとてせんどのじべー

産書

○又方

男おとこれ子こと産うらるゝハ赤小豆あかづき七粒しちりゅう生なしてのめ

女めの子産うらるゝハ赤小豆あかづき廿にじふ粒りゅう生なしての

救急方

○又方

水茶碗みづちawan二盃醋茶碗ふたまいすちawan半分はんぶん入いて産婦さんぷの

聖惠方

○産後さんご血ちあがりあがりりりよよい

伏龍肝ふくりゅうかんの下の灰はいのたろ
そと粉こなにいいて

救急方

○血^ち上^りり眩^まらるゝハ

黒漆^{くろし}を^て塗^り物^のを何^もも火^ひに焼^きて
産婦^{さんぶ}の鼻^{はな}の中^{なか}へ煙^{けむり}を^いれ^ばよ^しト

綱目

○産^え後^ご古^こ血^ちちり^らるゝハ

艾^{わい}式^{しき}の生^{せい}姜^が式^{しき}の^水水^{すい}を^てつ^りみ^じく^煎煎^{せん}
用^{もち}て^よう

孟詵食療本草

○産^え後^ご後^{のち}産^え門^{もん}の^らら^ら閉^しざ^らるゝハ

石^{いし}灰^{かい}を^いれ^ば黄^{わう}色^{しき}の^煎煎^{せん}常^{じょう}の^煎煎^{せん}と^いえ^んど^とて

時後方

其^{その}湯^ゆ氣^きを^てひ^きて^よう
●乳^ち病^{びょう}　　ら^のや^まい^らるゝ

○乳^ち乃^のぎ^りるゝハ

赤^{あか}小^{せう}豆^{とう}水^{すい}を^いれ^ばと^いえ^んど^とて^のみ^な又^{また}其^{その}小^{せう}豆^{とう}を^いれ^ば
食^くて^よう

産書

○又^{また}方^{かた}

胡^こ麻^ま炒^{しやう}塩^{しん}少^{せう}を^いれ^ば五^ご七^{しち}日^{にち}食^くへ^ば乳^ち乃^の出^で
ろ^ろの^ろ泉^{せん}の^ろと^いえ^んど^とて

唐氏

○妬^{ねた}乳^ち初^{しよ}て^はち^ちり^り痛^{いた}るゝハ

醋すゑとて梁上塵りやうじやうじん やしの下まきのとととて乳ちゆう

○乳ちゆうの上うへの腫物しゅぶつ一いっハ

○胡麻炒焦こま一いっ粉こなにて燈油とうあぶらととと

つぐぞう

本草

○乳癰ちゆうよう一いっハ

雄鼠尿ゆうしゆ 方とらり七ツ粉こなにて酒さけと

のじべー汗あせ出てし

毒域方

○又方

葱白切爛そうはくて熱あつ帛包いとて乳ちゆう方かたとととびぐ

鬚すてし前陰ぜんいん小便道せうべんどうの病やまひなり

種香仙方

○女にょ前ぜん腫しゆ或あるハハ痒かゆ或あるハハぶくと汗あせののり

たり抽出しゆしゆ来るくるらら一いっハ

胡麻口こまぐちとて嚼かぶららか付つてよし 肘后方

○女にょ前ぜん腫しゆ或あるハハ瘡かさ出で来きらら一いっハ

硫黄りゆうわう つ粉こなにてつけ

乾かんて付つてよし 唾つばとて付つてよし 肘后方

○女の前志きりし痒しハ

蒜水アリのミヅとせんと其そのせんとするもよ

さびわらひてより

医統

○女男おんなの會あひま交まり前まへより血ち出でるはハ

五倍子ゴバイシ 女のくちうくちう時とき つけとく

熊氏

○女の前まへ廣ひろて中なか冷ひやるはハ

硫黄イソ つけ本のほんのせきとせんと洗あてはく

心傳方

小兒門

●初生はつせい

生うれたからのときなり

○小兒こども生うれたるは時とき胎毒たいどくと下くだとよハ

胡麻生ごましとてくく嚼爛くわらんりり繪えよよつつみみてて兒この

口くちよよ入い乳ちののごとく吸すひひれれど胎毒たいどく下くだりりて

外臺

●不乳ふちう

生うれた子のこのちののつつるるなり

○小兒こども生うれたてて乳ちををののままどどりりハ

葱ねぎ白しろ一いち寸すん四しツつはは刻きり乳ちををかかりり入いれれててせんと

全幼心鑑

● 不尿 せれ子小便せらるゆあり

○ 小兒せれ出て尿せらるよハ

葱白一寸四ツ二刻て乳と少一入せんとて共

乳とりらめべし 全幼心鑑

● 大便不通

○ せれ子小便せらるよハ

婦入口とよく洗へ其せれ子れ心とあめりれ中

幼幼新書

● 撮口 口と閉帝聲出さるあり

○ 小兒せれ七夜中し啼聲出ど唇青く乳とよ

せらるよ

塩と臍の中よ入其上よ久木とせし 王母秘錄

● 臍風 臍より風引さる病なり撮口と似る病なり

○ 臍より風引て乳とのとくありよハ

艾黒焼かして臍乃中へこよよ入紙とせし

集簡方

● 臍瘡 臍より汁出るあり

○小兒疳疔 汁出或ハ腫痛ハ

伏龍肝アケツリ

粉ハ してハ

聖惠方

●口瘡

小兒の口中ハ やハ

○鵝口舌一面ハ 白く或ハ舌の下ハ 少ハ 舌の根ハ

物出来ハ

赤小豆粉ハ 醋ハ とハ 煮ハ 普濟方

○鷺口一面ハ 出来て舌白ハ

燕脂ハ とハ 煮ハ 集簡方

口中ハ 細ハ 瘡出来ハ

金下ハ 黒ハ つけてハ

普濟方

○舌の下ハ 又舌のハ 物出来ハ

伏龍肝ハ 酒ハ とハ 煮ハ

千金方

●軟癩

みづハ のハ

○暑ハ 時小兒の頭ハ 出来ハ

胡麻炒焦ハ 嚙爛ハ して

つけてハ

譚氏小兒方

●丹毒

とらふとのゆかり

○小兒丹毒一身いつこも春霞のぞくじく

と赤く出らるる

大豆濃くして其汁とらるべし

千金方

○又方

雞子清と赤小豆の粉をりては

小品方

○丹毒頭より赤くおらるる

葱をりつてその汁をまらつて

唐仲舉方

○丹毒いづらりたりと赤くおらるる

醋と右灰とをこつて

摘玄方

○又方

伏龍肝を焼く

粉にして新汲水

肘後方

●夜啼

○小兒何のゆもなきに毎夜おなを啼かすに極て

啼

燈花をとりて煮て乳をまらして小兒に

口へ入る

嬰童百問

○又方

五倍子

其のくろくつをとりて

唾

まじりてこねて小

兒の脬

よつてべし

楊起簡便方

●盤腸

小兒寒氣

よわり腹を痛身と曲て

喘病わり

○小兒腰

を曲て多く

啼き腹痛

よハ

○又方

葱

のつく炒つ

ととと

と脬乃

以上厚く

のせ

と

と

と

と

と

痛止

湯氏嬰孩宝鑑

●語遲

のりゆづらとさるり

○小兒四五歳

までりのいハざりよハ

赤小豆粉

ひいて酒

まてとと

と舌

れ下よ夜

くついでてう

千金方

●驚風

○小兒物

よ驚びくく

乱髪

男がのく

黒焼

ひいて酒

てのすせてう

千金方

○又方

本草

○鷲子とりつぎのまこてり

○鷲風遍身黒くならよハ

赤土醋してとれりてわつて炒給よ包惣身

と足の方へ熨してり

小兒秘訣

●疳

○小兒乃疳症一切の食物を同とりくらひてり

大小便水のごとく泄氣ぶとらりやうよハ

○艾五分水茶碗よ一盃入半分煎用也 備急方

●痘 けうそりめり

○疱瘡いまごせり

十二日は梅の花ととりて陰干して蜜をそ

れ酒そそのまられば疱瘡とん

種杏仙方

外科門

●癰

○背れも打らぬ熱して痛之何とけくをわり

時紙を投あふそりて彼やうくよは泄付

てるるべり一番よ乾而これりる癰の

口よなる石ちり其の交りて百粒を交りて
痛者ハ痛止痛さハ痛おて多ハ散て
きしちしずして口あさそく日納紋の患わく

李絳共部集

○既^{既に}口^口出^出来^来て腫^腫く^くら^らよ^よハ

黒大豆生^{くろまめうま}す^すて粉^{こな}け^けて水^{みづ}と^とこ^こに^に付^つじ^じ 本草

○又方

赤小豆粉^{あかづまこ}あ^あして水^{みづ}と^とめ^めら^らる^る一^一切^{せき}ハ腫^{はれ}物^{もの}も^もろ^ろく^く

小品方

○又方

伏龍肝^{ふくりゅうかん} たまごの下に灰の下の 蒜^{あし}等^ら分^{ぶん}は^は合^あ料^{りょう}煉^{れん}
して泥^{どろ}の^のど^どと^とて^て干^かけ^け付^つく^く 外臺

○又方

米^{こめ}の粉^{こな}四^よ又^{また}葱^{ねぎ}白^{しろ}も^もふ^ふら^らり^りして黒^{くろ}く^くら^らる^る
か^かと^と炒^{あぶ}て醋^{すう}を^を入^いね^ねて^てつ^つぐ^ぐ 癰疔 一切の腫物腫て硬く無頭者ハ先付ては外科精義
癰疔^{ようぢやう}其^{その}外^{ほか}一^{ひと}切^{せき}乃^{すなは}腫^{はれ}物^{もの}口^{くち}愈^よじ^じ濃^のゆ^ゆら^らよ^よハ
胡麻^{ごま}黒^{くろ}く^くら^らる^るを^を炒^{あぶ}粉^{こな}け^けて^て付^つて^てり^り 千金方

● 疥癩
○ 疥ハ頭面手足よ生と紫色のりて泡のこく
頭ハのうくて丁蓋のこりて先此薬と付
て

○ 又方
鼠尿等分黒焼あて
針して腫物の口とわら右の薬を吹
へて

○ 便毒腫痛
魚肝油禁方
蒜してとりつりて

○ 下疳
陰莖のやまひ
五倍子
土鍋の中へ醋ちりりて入火
ゆきと煎つめどろくとひりりり時或ハ布綿
うま貼てつぐじ乾バなぐく出てり

○ 前陰たぐれ或ハ瘡出末さらよハ
黒焼あて付ては

乱髪
心鑑

○又方

五倍子

カノミミツクノ角カノミミツクノ角 黒焼カノミミツクノ角して甘くは

種杏仙方

●疥瘡

しんじょうとのゆきり

○賺瘡汁を分よハ

塩とりつりてす

永類方

○又方

五倍子

カノミミツクノ角カノミミツクノ角 塩とりつりてす

種杏仙方

○賺瘡久く愈ざらばハ

杉木黒焼杉木黒焼あして胡麻油胡麻油をとこと付ては

救急方

●疥瘡

いせんくさのゆきり

○疥瘡手くゆ物身をもとせよハ

竹の葉黒焼竹の葉黒焼して雞子清雞子清をとりては 楊氏産乳方

○疥瘡も来て月數をよハ

塩を唾唾すてアけてす

千金方

●癩風

ひまわりのゆきり

○癩風白くても赤くても此方を用ひてす

生姜生姜れをやり汁汁と茹帶茹帶すてとりつりてす

○又方

医統

○又方

小麦ニヒギ黒焼コウマキよりして鉄テツの物モノをてりて油アブを
かきすりつけたり

医学正傳

○又方

布切ヌのせんと板イタの上ウヘより四方ヨウホウを針ハリして打付ウチツケ硫黄リウウと
つね木のちまきツネノキノチマキ粉コよりして雞子清ニキシヨウをてりて彼ウチ
の布切ヌのせんよりつね布切ツネヌのせん縮チヂムさうやうして乾付カハツケ
とて癩風カササキの上ウヘをなぐこすりては

医統

○又方

硫黄リウウ 粉コよりして生姜シヨウキヤウを

かり汁カカリシユをてりて

癩瘍機要

●厲風レイフウ 癩病レイビョウ有り俗ソコよえんぶエンブううウウのうウを

○癩病レイビョウ爛ランしてえりり汁シユおろよハ

五倍子ゴパイシ 唾ツボをてりて

普濟方

○又方

生の竹ナギの筒ツツ十トウは黒大豆コウダイマメと一盃イツパイみつめ又生ナギ乃
竹ナギの筒ツツは乱髪ランカツのちりり
一イツははりて稿カウ火カ
をてりて生ナギ乃り汁シユおろり其汁ソノシユを盆ハシ

よらけをこしてをれぬうて瘡の上よつくぬ
一切の腫物よをこす
邵真人経験方

●諸瘡 惣と瘡の類よよくの薬とわらぬ記と

○悪瘡久しく愈ざらぬハ

家三軒の挽乃洗汁とわらぬ塩水に入れて
其瘡と洗てより

簡要海衆

○又方

石灰雞子清よこねてよくわらぬ粉り
て生姜のちやう汁よ付てより

救急方

○面よ出来くろ瘡よハ

柳の木塩水に入きえんド洗てより

本草樓奇方

○一切の悪瘡又ハ疥瘡よハ

燈蓋の油よりてより

本草

○小兒の疥瘡よハ

綿木綿より唐綿黒焼りてつりてよ

傳氏活嬰方

○小兒の頭瘡よハ

皮鞋底よりこすこの皮洗こよめ煮爛てより

聖惠方

○又方

黒大豆くろまめを炒あぶりて粉こなにしててみしてととはく

普濟方

○漆瘡しきそうよハ

磨こり石上泥いしの上の泥をすりわりてすり

医林集要

○又方

韭菜さいがいをすりつつてすり

医林集要

○又方

蜀椒しやくけうのすり汁じゅうをすり洗せんてすり

医林集要

○又方

杉すぎの木こをすり洗せんてすり

衛生易簡方

○漆しきよすりけすりよすりこすり人すり漆すりよすりますりのすり方すり

川椒えんじょうのすり汁じゅうとすり面めん手て胸むねをすりどすりいすりわすりりすりてすり

物類相感志

○白屑びやくせつかすりつすりかすりますりよすりハ

蒜あし蘆ろれすり汁じゅうをすり髪かみとすり洗せん髪かみ乾かわてすり後のち

医聖入門

○臭くさ丸まる瘡そうよすりハ

葱のせんで汁をすりわくひよく拭乾し胡麻油つけてすり
外科正宗

○疣瘡よハ

初よ出来たらに灸を灸れば皆愈る
医学入門

○療疽かすりて指痛よハ

伏龍肝つくりかたの下の灰の下に竈突墨かまのくろくを合せて濃せんと洗て
竈屋塵かまごけを合せて濃せんと洗て

瘍科準繩

○天蛇頭よハ

鶏子に竅を削汁をあげつけてすり
瘍科準繩

○乾癬よハ

巴豆炭火をすりわづり油とよくあけて後すり
瘍科準繩

○又方

馬齒莧すりつけすり
瘍科準繩

○又方

梅子 蒜 梁上塵かまの下の灰のよの 塩しほ 石等分
醋よ一夜浸つけすり
瘍科準繩

○又方

日中に日向へおて乾癬の所と目よわてその
日蔭の地よ三壯灸とへー

瘍科準繩

○癩瘡よハ

滑石五分菜豆粉せんじょうのこ四しふふろろととここつつけて

瘍科準繩

○嵌甲疽よハ

足袋八つまりてわいのまねらるるの
陳皮ちんひここのの皮の皮の濃なせんせんでで洗せんててよようう

医学入門

○又方

梅子うめこ肉にくををろろつつけけててよようう

瘍科準繩

○一身いんはは猫ねこのの目めののどどくくかかりり瘡かさがが来来てて膿うみ血ちがが痛いたみみ

○瘡よハ

雞葱けいそう韭いとと食くててよようう

夏氏益奇疾方

●杖瘡じょうそう へへのの類るいとと記きをを

○人ひとはは杖じょう棒ぼうををくくくくれれ痛いたみみよよハ

伏龍肝ふくりゅうかん かかままのの下したのの粉こなをを油あぶらとと

千金方

ととととりりててよようう

○又方

胡麻油ごまのあぶらわつくこく鐘かねよ一盃いっぴのこは吹劍續録

○又方

五倍子ごばいしつろりつろりなり醋すつくとさろりさろりによ衛生易簡方

○又方

大豆粉まめこあつてついでより千金方

○高所たかところより落おち或ハ骨と打折痛うちやぶよハ

大豆まめせんせんののみみててより千金方

○一切さい乃打身皮破うちこさろり者ものよハ

○生薑せいしょう葡萄ぶどう汁じゅうついでより邵氏方

○一切さいの打身うちこよハハ

○生薑せいしょうののままりり汁じゅう酒しゅ等とう分ぶんよ合あ温うん飩どん乃粉のこな

とろりとろりで貼はりてより易簡方

○又方

石灰胡麻油いしごまのあぶらよついでより集簡方

○又方

胡桃くるみの肉酒にくしゅよよちちりり拵つとぶぶこのこのよよ医統

○又方

五十九

葱白杵爛いものまろくつあつくりりて其痛いぼむらうふと至いたて
わくりてよう一葱白いものまろくつ冷ひやバいんくはつけ
てこう

正體類書

●金瘡きんそう 三つりまてよう

○金瘡血きんそうちゆうあてやまぶさうふいハ

釜臍墨かみせぼくをとりついでよう

開寶本草

○又方

香爐灰かうろうかいほけてよう

本草

○又方

五倍子ごばいしをのぶくろつるしをほけてよう

談藝翁方

○又方

葱いものまろくつわくわがり汁じゆとぶらりりよう

梅師方

○又方

生姜しょうしょう嚼くつけてよう

扶壽方

○又方

石灰いしゐいついでよう一白壁しろかべとこぼけてはじよ時右方

○金瘡血きんそうちゆう多く出でてさまううず身冷みひやまバ死しを早はやく

塩しほと炒あぶて三撮酒さんさつしゆよく用もちなう

梅師方

●湯火傷（湯火傷）

やけどのよき方

○火（火）も湯（湯）も人（人）の身（身）よからむやけどもさうみ
井戸底の泥（泥）りりてう（う）

證類本草

○又方

胡麻生（胡麻生）を嚼（嚼）つてう（う）

外臺

○又方

醋（醋）を洗（洗）てう（う）

北夢鎖言

○又方

生蘿菔（生蘿菔）の汁（汁）をう（う）

聖濟總錄

○又方

石灰水（石灰水）をう（う）

肘后方

○又方

灰水（灰水）をう（う）

医統

○火（火）を焼（焼）

酒（酒）を洗（洗）ひ其（其）の塩（塩）をう（う）

医学六要

○扱（扱）火（火）を酒（酒）で

糯米（糯米）を炒（炒）粉（粉）にしてう（う）

医学六要

○灸（灸）瘡（瘡）

まろのいぼ（まろのいぼ）をう（う）

伏龍胆くまの胆の尻の皮の水を煮て洗てよ

千金方

○又方

春ハ柳やなぎの白しろ花はなをつり夏ハ竹たけの中なか紙かみをつり
秋ハ綿わたをつり冬ハ兔うさぎ乃毛の毛をつりては

資生經

●虫獸傷

じのきしるるをり

○蛇足へびあしは繞まきまわて解とざるは

熱湯あつみうけてよ

千金方

○又方

小便せうべんしりてよ

肘后方

○毒蛇どくへびのさしりよ

鹽しお嚙くはてり其上そのうえよ灸灸てて三壯さんすう灸灸て又鹽しお

徐伯玉方

とわりてよ

○又方

灸灸てて灸灸てよ

集簡方

○又方

生姜しょうがのさしり汁じゅうついでよ

本草

○蛇へびのさしりわと瘡かさとかりりよ

わつさ酒さけまてななく洗かてよ

廣利方

○蜘蛛くんで痛其外一切の虫のこころよハ

經驗後方

○蜘蛛のこころよハ

本草

○蜈蚣のこころよハ

或塩湯よてあらし

梅師方

○又方

蝸牛とらとほけて

鐵圍山叢談

○又方

雞子清ぬりて

瘍科準繩

○蟻蛄人をこころよハ

聖惠方

○石灰醋よてとこころよハ

○蜂のこころよハ

千金方

○又方

小便よて洗て

肘后方

○又方

其すれりし水を湯に浸してこのごとく
湯冷まなくして浸こぐ
大平御覽

○刺毛虫しりまむしすりまひ
伏龍肝ふくりゅうかん 昆布こんぶ 酢すう 水みづ をとじてつけて

○蚯蚓うづも として毒内どくうち に入肩髪いりかみ ぬげ癩病しかび のごとく
瘍科準繩

○小兒せうじ 蚯蚓うづも は小便せうべん してして 石灰せっかい のあつて洗あら せり
經驗方

○田い 火吹竹ひふきたけ を吹ふ せり
本草

○田い 行者やうぎやう 蛭むし はさるは 行方ぎやう
油あぶら は塩しほ を入い てして 是こ はは 蛭むし のつてさす
病原候論

○夏なつ の夜蚊よぐし の無な きは さい
端午たんご 日ひ 午時ぶし 儀方ぎ の二字にじ と紙し に書か けて柱はしら 毎ごと に
張は ち蚊むし が
種杏仙方

○蟪くひ 子こ は無な きは さい
端午たんご 日ひ 午時ぶし 白しろ の字じ を紙し に書か けて柱はしら の上うへ の方かた 四所しよ
張は ち蚊むし が
種杏仙方

○蟪くひ 子こ は無な きは さい
端午たんご 日ひ 午時ぶし 白しろ の字じ を紙し に書か けて柱はしら の上うへ の方かた 四所しよ
張は ち蚊むし が
種杏仙方

○猫の咬らるゝハ

雄鼠屎お方らり 黒焼くろやき 油あぶら

毒域方

○鼠の咬らるゝハ

糖ねこの屎くそ けりて

本草

○犬の咬らるゝハ

雄鼠屎お方らり 黒焼くろやき 油あぶら

梅師方

○又方

犬の食らるゝハ 三壯灸さんじょうあし

内經素問

●骨鯁ほねざら 魚の骨いさなほね 又ハ竹たけ 骨ほね 咽のど

○魚鳥いさどり 骨咽ほねのど

五倍子ごばいし 細茶さいさ 引茶ひきさ 等分咽とうぶんのど

口齒類要

○又方

水茶碗みづちawan 一盃ひとさき 酢す 虎とら 丸まる の眼め 中ちゆう へ 龍りゆう とと 字じ と書か 入れてのびひ 小兒せうに 骨ほね 乃なり

○又方

自巳の髪黒焼ししてきよ酒とてのみて

延齡至寶方

○錢と香くらよハ

炭粉あてて白湯まてのみては

口齒類要

○金銀をのこらよハ

琉黄つり木のらさり石灰等分酒まてのそ

孫用和秘宝方

○又方

艾水よてまんだのびべー

錢相公篋中方

○小兒針とのみくらよハ

黒砂糖丸一用ひてり

濟世全書

●五絶

縊て死すと魘て死すと空より落或は
よ打れて死すと水に溺て死すと凍て死
すと五色の死死するのせこハたとひ

○自縊死し者あつハ除よ繩をゆりめ上下に被

とらせ一人ハ足の足よ縊者れあの肩とまら

てよりしてカ一よの髪を引る

利髪を髪
まらあの取のわをへ

又一人ハ脚の正とさすりべし又一人ハ臂と
足とをのべり屈よりすべし半時より如此に
ハ息出らるり息出て後又半時より前よりト
て後溺清とすくく用ゆべし人大勢有らる
バ右乃外よ又友人して病人のぬれ耳を筆に軸
めて一度よ吹金一猶以り如此してハ活ら
者か朝縊て暮よ見付らるハ死切身冷て
活と夜中に縊て明朝見付らる活と

○又方

金匱要畧

梁上塵 豆の大きき筆乃軸
入れ同トやうに四ツラて四一人して病人
の鼻に孔ぬの耳へをの宛ら入血息を
ろく一なるよか吹入金一即活らる外臺

○又方

葱の長さ六七寸病人のぬれ耳鼻へさし入る
金一血少一出て息出金一

本草

○魔死者あつハ舌づりよよても又ハ風呂敷乃
やうき物よても病人の口鼻よわす息出

ぬやうにして懸へて扱病人の眼開たうばあうま
小便一い口小入をう一暫あうて正氣よわう

○又方

伏龍肝下のやけつらまじり粉にしてきまむど鼻に
中へ吹入てう

千金方

○鬼魘死ハ喚活べし其病人の脚跟とカ一い
口あて咬べし又其病人の面へ唾と吐かべし
初より燈あうバ燈を遠をうしうし初より
燈あうころころりあて魘鬼死ころよハ燈をとも

とてあうらうす

○又方

梁上塵やねの下の粉の鼻の中吹入七

瓊碑録

○又方

温酒面よくれば活る

肘後方

○人晝夜ととに何の故もあう死入ころよハ葱七
八寸鼻乃中へさし入らうし血出て甦男ハ尤
の鼻に孔へ入れ女ハ右の鼻に孔へさし入らうし
此扁鵲傳なり

崔氏纂要

○溺水て死よりよハ

塩と脬の中へ入るべし

救急方

○又方

石灰を布切に包て屍乃穴へさし入れ居る
暫し水出て活

千金方

○又方

竈灰二石を病人を埋るに水出て活

金匱要略

○又方

梁上塵或は上は鼻孔へ吹入てり

本草

○高き所より墮大木大石より打れ或ハ馬より落るる

病人の口鼻眼の上より風よりきれりる物と
く息の出るやうにして是を暫し
息出らなり息出眼開バ焚き小便をのまよと

千金方

○高き所より墮絶え入らんとて言ふるよりよハ

急き焚き小便の手をせてり

医学六要

○冬日凍死て四肢直に口嚙少く息をりわらよハ

大釜ゆて灰とわく炒袋よ入て心上と尉ては

冷れと換ふ。眼開息出て後熱清と少つて用て
うーとー火とて温れを早速よ死と

○又方

奇世保元

急よ地を深さ二尺ぐらゐり長さ六七尺の堀を炭と
多く火よちかして彼穴の中は焼とて穴の中よ
くわくまらゐる内火と取のけ炭とて心く其上
よ病人と卧させ上よ物と多くこまを足金
汁多く出でり

夷堅志

●中惡

○死人の氣よちれ或ハ墓よ行くとして死人の毒氣
よわたり腹痛よハ

鍋墨五々塩をよ白湯でそのくせり

千金方

○又方

塩赤くわたりを炒て酒よそのじをう

痰と吐て

甄權藥性論

○あま夢と見て覺ても身よ青さわたりつらよハ

塩水のみてり

救急方

●雜病
いぼよちくせやまの葉よのす

○狐臭よハ

伏龍肝

くまとのしほ灰の
下がるけまきり

粉にして煮くるとんじ
けてり

千金方

○又方

生姜のきり汁ついでり

易簡方

○轉筋腹よハ痛よハ

鍋墨を酒でついでり

肘后方

○脚氣よハ

毎夜塩を腿膝よどりりりて毎夜熱湯に足

救急方

○消渴して水と飲よハ

の甲まで浸してわくびべり

五倍子女のきり汁を水でついでり

危氏得効方

○手足の霜腫よハ

山藥竹の皮を水でついでり

儒門事親

○耳の霜腫よハ

生姜のきり汁わくついでり

假日記

○世間流行病わくとこころうらぬ方

新し布の袋よ大豆を入れ一夜井中よけり

藍聖日取糶一入よ七粒づのりぐりやまふ
うらうら

領要

○又方

新しき布袋よ赤小豆と入れ井の中に三日浸し
透て三月目の夜取水して家内の人不殘新汲
水よて東よ向い男ハ三十粒女ハ二十粒づ三日
のびぬ流行病うらうら

医統

○疫病うらうら府

靱筋し 如此紙よ書て門口よおせは疫病

うらうら

群談採録

○一年中流行病よとまのざり方

正月朔日より十五日の夜赤小豆十四粒胡麻
七粒井の中へ入るへ其水を飲ん一年中

五行書

○又方

元日東よ向ひて藍と小豆とをのりを年中
病か

本草

○又方

立秋の月七月の酉酉に向ひて。朝の一番水水を赤
小豆七粒七粒のめし。年中痲病痲病とさつとど。本草

○瘰癧ろいれきのハ

芥子の粉粉醋醋と酒酒とを貼貼てり

時後方

○又方

五倍子五倍子のろりて角醋角醋をてりてり
破破ハ蜜蜜みそとさめり。魯府禁方

○身面みへに疣疣出来出来ころまハ

醋醋を石炭石炭と浸浸して上汁上汁をなくつては。千金方

○竹木刺肉たけのこならころまハ

頭垢かぶかみめりてり

劉涓子

○又方

梅子の肉肉をりつてり

梅師方

○又方

生姜生姜 橘皮橘皮 塩塩 等等 分水分水 煮煮つりてり
即出即出ろ

医統

○又方

胡椒胡椒の粉粉 食粒食粒 ちりてり

唐科準繩

○人の咬付て痛よハ

血よ熱あつき小便せうべん入れ一夜いちやひひてり

通變要法

○陰囊いんなんふらりよ痒かゆよハ

五倍子ごばいし 女のくろくろてり とりつけり 本草

○惣身そうしんよ風かぜ多おほくくりりて後のちよハ血ち肉にく壞こわ痛いた痒かゆよハ

醋すよ塩しほと入いととえんどのみみてり 奇疾方

○小便せうべんの中なかより屎し出い大便だいべんよ小便せうべんを出いすよハ

舊ふる襖うす頭あたま黒くろ焼やりりて酒さけふて五分ごぶん許りのとては怪病單

○焼死やけどて息いきいまととわらるよハ

小便せうべん多おほくのよまませてり 千金方

○鍼はりとたたくく折お込こりよハ

何鳥なにとりの羽根はねよも四五四五枚まい黒くろ焼やりりて醋すふて

三折さんせつりり鍼はりの上うへよ貼紙はりしあてりりてるベ

折おりり針はり自出みで 鍼灸聚英

○又方

象牙ぞうがけの屑くずあまてりてり 肘後方

○灸ましてりがいはい入いりんと思ふ

故草履こそうりのららと火あをあてりてり 灸

の上とあつても三日の中はつりかみ

甲乙經

○五穀其外一切の食物をくろくを絶も亦は病なくは

足は力少と表はる方

○又白米をそりて井籠よ入色百度蒸す一握

づ毎日水おて三十日のあぢで死すて一切の食

物ららへくしげず

壽世保元

○又方

○黒大豆くくりて一日食物をくろくす翌日

みの黒大豆食て外乃食物を食事なく渴時

ハありをのむべし如此一年程をれを後ハ

一切の食物と食う事なくして仙人とあり

博物志

○又方

黒大豆五合胡麻三合水よ一夜浸し蒸す三度

扱くすて二色ともにもよめて皮と取つて

くろくす拳れ大よつね甑の中に入れて戌乃刻

より子の刻まで蒸して翌日寅時よ取出し

日よす付て食る事拳の大よつねよりと

きろく食へん七日飢えん七十日食へん四十九日飢す

三ツの食へて三百日飢とて食へん二千四百日飢と顔

色どろろと手足の働少と變事也 王氏農書

私云右三方ハ唐土少く飢饉の時多し多く人と

濟より名方より朱賈貴とろろし人ハ

早く調合して用る

○人の通る谷又ハ井の中をくく落入或ハ海上をくく

切れ食物をこすよと命とつるさぢし五射氣力衰

ざろ方

口は唾をいりてハのみをみ又なりてハの

み如此とろろ一月一夜は三百六十度のとろろハ

何十日みてても死せど

壽世保元

私云十箇年許已前予武列は住し比常

は心安く交る僧祈願わけて七日断食して

禮拜行道と同行の僧一人あり彼僧は右

唾どのみえむ方と教ゆ彼僧深く信じて

相勸む同行の僧ハ朝英て不用行法六月は至

て同行の僧ハ手足痛殊外はろろし又唾

のみをみし僧ハ變事なく行法を

成就一傳

○落下類

病人と正しくかきこまをせ正面より外の人類とを

のふふ持上げ友の大指と病人の口へ入一拍子に

あり上れを忽愈

○傳尸勞瘵病付て同の無之中に用ゆれど愈方

外科正宗

川椒内の白膜と目とを取捨て川椒の赤正づり

火中てあし炒汗を出して後うくさ飯粉

にりて式まつて空心は食ハ湯おてのめん虫

びりてより

種杏仙方

○男女前陰の毛ふ虱つらとてお瘡良よハ

銀杏皮ととりて擦つてより

六要

○又方

朱ととりつてより

六要

袖珍仙方畢

正徳五年乙未二月吉日

京師小路通堀川東入町

書林 中川茂兵衛板

心母子あゝ園ふ

あまあまあまあまのあ

あまあまあまあま

右者油小路宰相殿御自筆也

岸友勝之品

加賀國金澤
鳳岳宮庄氏
之塾駕林堂
岸友勝之印



ソウウ

